

加藤清遺稿 蔵文和譯『世間施設』（3）

福 田 琢（編）

目 次

第4巻

第7章（承前）

7-3. 最勝宮（帝釈天宮）／7-4. 善法会堂（三十三天の会堂）／7-5. 衆車遊園（三十三天の遊園）／7-6. 衆善地／7-7. 籠澀遊苑／7-8. 籠澀善地／7-9. 雑林遊苑／7-10. 雑林善地／7-11. 歡喜林／7-12. 歡喜善地／7-13. 圓生樹／7-14. 教証／7-15. 如氈布碧板／7-16. 象王園行守地子／7-17. 阿修羅の住居

第5巻

第8章

8-1. 太陽の運行と昼夜の長短／8-2. 月の満ち欠け／8-3. 四州の方位の相対的關係

第9章

9-1. 月の量／9-2. 日（太陽）の量／9-3. 諸星の量／9-4. 日と月（諸餘の問題）

第10章

10-1. 四大と諸想／10-2. 時節に於る昼夜の長短／10-3. 時間単位

第11章

11-1. 大劫（教証）／11-2. 三災／11-3. 三中劫／11-4. 刀兵劫／11-5. 十善業と寿命の延長

* 前々号、前号に引き続き加藤清遺稿『施設論』和訳研究ノートを紹介する。今回の内容は全九巻よりなるチベット訳『世間施設』の第四巻、第五巻にあたり、これであろうやく半分を越えた。残る部分の整理を急ぎたい。なお前号で「『世間施設』

(3)は『同朋大学論叢』に掲載すると予告したが、編者の作業が遅れたために原稿が間に合わず、本号での公開となった。ご迷惑をおかけした関連各位にこの場を借りてお詫び申し上げます。

第4巻 (229)

[Peking, No. 5588 khu 34b⁷] 世間施設第四巻なり。

第7章 (承前)

7-3. 最勝宮 (帝釈天宮)

[34b⁸] 天城中には諸天の主なる帝釈の宮殿「最勝」(Vaijayanta)と名づけられるもの、長さ二百五十由旬、幅に於ても二百五十由旬、全周千由旬、形容は善く樂見するところにして端嚴なるものありて、天城より四由旬半にして上方に聳立す。

[35a¹] その最勝宮の礎石は四種に依止してなる、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。最勝宮の門限は四種によりて建てられている、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。最勝宮の柱は四種によりて建てられている、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。金〔の柱〕の礎石と斗拱 (kṛkātaka) と上椀 (śīrṣaka) と梁とは銀によりて作られ、銀のは金によりて作られ、瑠璃のは水晶によりて作られ、水晶〔の柱〕の柱礎と斗拱と台輪と梁とは瑠璃によりて作られる。

[35a⁶] かの最勝宮の簷は四種に依止してなる、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。最勝宮の簷は四種の力を持するものによりて作られてあるなり、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。最勝宮に四種によりて作られたる階〔道〕あり。それ等の階〔道〕は又、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造といふ四

種の縁によりて建てられてあり。最勝宮の欄干は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種によりて普く遶らされ、金の欄干の台座と台階子と釘子とは銀を以て造られ、銀のは金を以て造られ、瑠璃のは水晶を以て造られ、水晶の欄干の台座と台階子と釘子とは瑠璃を以て造られてあるなり。

- [35b³] 中間の頌に於て「依止と門限と柱と簷の依止と力を持する簷とあり、中庭と門楼板房 (phalakacchadana) と廓等とは最後にあり」
- [35b⁴] 最勝宮には円蓋楼閣あり、各々の円蓋楼閣には又七個づつの楼閣あり。各々の楼閣には又七個づつの住房、各々の住房には又七人づつ天の童女、各々の侍女に七個づつの繻あり。
- [35b⁶] 最勝宮の中には蓮池が作られ、その蓮池は長さ五十由旬、幅に於ても亦五十由旬、全周に於ては二百由旬あり。その蓮池の四方に階〔道〕が作られてあり、それ等の階〔道〕は又、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造といふ四辺によりて建てられてあり。その蓮池の四方は又、欄干によりて普く遶らされ、欄干は四種等によりて前の如くに作られ、形容は善く樂見するところにして端嚴なり。
- [36a¹] 水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黄蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる鳥の群が、美妙音と意楽音と柔軟音と、隨欲転の有色の妙音を発するなり。
- [36a³] その池の近辺にはあらゆる種類の花樹と果樹とありて善く育ち、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘 (karṇika) を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。
- [36a⁴] 水より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、隨欲転の有色の妙音を発するなり。それ等の近辺には青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白

の四種の如意樹所生の衣あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。種々の樂器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[36b¹] 甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高櫓と諸樓閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戲所と諸橋梁とは婦人の集まりによりて美術され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囃したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て天の主たる帝釈は眷屬と共に戯れ歡を尽して自己の業の果を享受するなり。

7-4. 善法会堂

[36b⁴] 天城の東南方に三十三の諸天の「善法」(Sudharma)と名づけられる会堂あり。長さ三百由旬、幅三百由旬、全周九百由旬あり、天城より三由旬半高きなり。天の会堂「善法」の一切の土台と高櫓と柱と、上部に集まりたる梁と、高櫓の四の尖端と、簷の斜線と重簷とは水晶によりて作られ、形容は善く樂見するところにして端嚴なり。欄干は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種によりて遍く遶らされ、そこには門と廓と高櫓の四の尖端と、溝と重簷とあり、各々の重簷は又、各々十六の柱によりて遍く依止し、遊道には七路あり。その中央に瑠璃で作られたる八角の柱は、明瞭にして瑕なく、高貴にして精緻なり。毛端ほども高樓に普く集まれる依止を知らざるなり。

* 編者補注：最後の一文は編者には意味不明である。原文は skra'i rtse mo tsam gyis khang pa brtsegs pa'i spyi 'dus kyi rten la mi rig go / [37a¹⁻²]

[37a²] その後に天の主なる帝釋の金の善坐と、諸餘の三十三の坐が具へられてあるなり。そこに三十三の諸天は集まり、座して諸天と諸人の利益と法とを思惟し、実行し、完全に觀察をなすなり。

[37a³] 天城より遊道は、長さ十二由旬、幅もまた十二由旬、形容は善く樂見するところにして端巖、金砂を撒布し栴檀の水を撒布したるものなり。その左右両側には、花樹と果樹の様々なもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[37a⁶] 陸より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。天城を七の濠 (parikhā) が漸次に善く囲み、それ等の濠は亦、深さと幅とは一由旬程あり。縁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種によりて造られ、水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黄蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる種々の鳥が、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。

[37b²] (246) それ等の濠には種々の [水渠や……や穀類等より作られたるもの] 等あり。

* 編者補注 : [] 内は遺稿に訳文を欠く。原文には *chu ka dang/rgyu mo gung dang/'bru sna tshogs rnam byas pa* とある。はじめの *chu ka* を *chu rka* に訂正し「水渠」と訳してみたが確信はない。次の *rgyu mo gung* も意味不明。今のところ『世起經』類や『立世阿毘曇論』などにも対応記述を見いだせない。乞御教示。

[37b³] 三十三の諸天は水の遊戯に戯れて歎を尽し、それ等の濠の近辺には、花樹と果樹の様々なもの善く成長し、妙形にして遍く成ずる

こと花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。陸に生じたる種々の鳥は、美妙音と意楽音と柔軟音と、隨欲轉の有色の妙音を発するなり。そこに三十三の諸天は眷属と共に戯れ、歎を尽し、己の業果を享受するなり。

7-5. 衆車遊苑

[37b⁶] 天城の東方三由旬に「衆車」(Caitraratha) と云はるる三十三の諸天の遊苑 (udyāna) あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて形容は善く、樂見するところに於て端嚴なり。金の墻壁を以て遍く遶らされ、その墻壁の高さは一由旬ありて、その墻壁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の墻衛護あり。上方に聳ゆると及び下方に垂下りたる箭窓と、連続せる橋梁とは四種あり、金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。その中の敷地は形容善く諸天を端嚴に画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること恰も兜羅綿 (tūla) 若しくは綿の花弁の如きなりて、足を置くときは凹み、足を揚げる時はもとに復し、無量の曼陀羅花は膝を没する程に普く覆ひ、風の威力を以て枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなり。此の如く諸天は福德の威力によりて衆車に大風を起し、枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

二
三
三

[38a⁶] 衆車苑の中に蓮池あり。長さ五十由旬、幅に於ても亦五十由旬、全周二百由旬あり。その蓮池はまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られ、その池の四方には階〔道〕もまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られてあ

るなり。欄干は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種によりて遍く遶らされ、水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黄蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる種々の鳥が、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。その蓮池の近辺に、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[38b⁵] 陸より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。〔それ等の近辺には〕青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。種々の樂器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[39a¹] 甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高櫓と諸樓閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戲所と諸橋梁とは婦人の集まりによりて美飾され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囀したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て三十三の諸天は眷属と共に戯れ飲を尽して自己の業の果を享受するなり。

[39a²] その道は、長さ二十由旬、幅一由旬半、形容は善く樂見するところにして端嚴、金砂を撒布し梅檀の水を撒布したるものなり。その左右両側には、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如

きなり。

[39a⁷] 陸より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。〔それ等の近辺には〕青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の楽器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[39b³] その道に種々の乗物、即ち象乗と馬乗と車乗と籠乗などが備えられてあり。諸天或いは天女等が応に乗物を欲する心を生ずるや否や、此の如き乗物に乗りて衆車遊苑に詣りて戯れ、歎を尽して自己の業の果を享受するなり。

[39b⁵] 云何の故にか遊苑の名は「衆車（雑色車）」と云はるるや。曰はく、衆車遊苑中には衆蓮と云はる池と、衆車と葉と花と衆果と衣と衆莊嚴と衆天女あるを以ての故に。三十三の諸天は衆車遊苑中に戯れ、戯れを尽すとき、またあらゆる種類の樹のもとにて戯れ、歎を尽して自己の業の果を享受するを以て、その遊苑を「衆車」と云はるなり。

7-6. 衆善地

[39b⁸] 衆車遊苑の東方二十由旬に「衆」(Caitra) と云はるる善地 (subhūmi) あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて形容は善く、樂見するところにして端嚴なり。欄干は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種によりて遍く遶らされ、金の欄干の台座と台階子と釘子とは銀を以て造られ、銀

のは金を以て造られ、瑠璃のは水晶を以て造られ、水晶〔の欄干〕の台座と台階子と釘子とは瑠璃を以て造られてあるなり。

[40a¹] その中の敷地は形容善く樂見するところにして端嚴にして、画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅綿若しくは綿の花弁の如きなり。足を置くときは凹み、足を揚げる時はもとに復し、無量の曼陀羅花は膝を没する程に普く覆ひ、時に諸の非人は風の威力を以て枯れたる諸花を投げ捨て、新しき諸花を善く撒布するなり。此の如く諸天は福德の威力によりて衆車に大風を起し、枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

[40a²] その道は、長さ二十由旬、幅一由旬半、形容は善く樂見するところにして端嚴、金沙を撒布し梅檀の水を撒布したるものなり。その左右両側には、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[40b²] 陸より生じたる鳥の群は、美妙音と意樂音と柔軟音と、隨欲轉の有色の妙音を発するなり。〔それ等の近辺には〕青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の樂器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[40b⁶] その道に種々の乗物、即ち象乗と馬乗と車乗と籠乗などが備えられてあり。諸天或いは天女等が応に乗物を欲する心を生ずるや否や、

此の如き乗物が来たり。それに乗りて「衆」と云はるる善地に詣りて戯れ、安穩に住して明かに歎喜をなすなり。そこに於いて天の諸仏は自由に梵行を修するなり。

7-7. 麁澀遊苑

[41a¹] 此の如く天城の南方二十由旬に「麁澀」(Pāruṣya)と云はるる遊苑(udyāna)あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて形容は善く、樂見するところにして端嚴なり。金の墻壁を以て遍く遶らされ、墻壁の高さは一由旬あり。乃至、衆車遊苑の如くに広説されるなり。

[41a³] 云何の故にか遊苑の名は「麁澀(麁惡)」と云はるるや。曰はく、麁澀遊苑中に麁澀と云はる蓮池と、樹と葉と花と果と莊嚴の麁澀なると、諸の麁澀天女あるを以ての故に。三十三の諸天は麁澀遊苑中に戯れ、歎を尽すとき、身体も麁澀になり、心も亦麁澀になり、戦をなさんとするを以ての故に遊苑の名は「麁澀」と云はるなり。

7-8. 麁澀善地

[41a⁶] 麁澀遊苑の南方二十由旬に「麁澀」と云はるる善地(subhūmi)あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬あり。〔乃至〕 応に「衆」と云はるる善地に於るが如くに広説されるなり。

一一九

7-9. 雜林遊苑

[41a⁸] 天城の西方二十由旬に「雜林」(Miśrakavana)と云はるる遊苑(udyāna)あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて、金の墻壁を以て遍く遶らされ、墻壁の高さ

は一由旬あり。応に前に説けるが如くに広説されるなり。

- [41b¹] 〔但し〕此の殊別あるなり。云何の故にか遊苑の名は「雑林」と云はるるや。曰はく、雑林遊苑中に雑と云はる蓮池と、樹と葉と花と果と衣と、莊嚴の雑なると、諸の雑天女あるを以ての故に。三十三の諸天は雑林遊苑中に戯れ、歎を尽すとき、種々に混合して戯れ、歎を尽して己業の果を享受するを以ての故に遊苑の名は「雑林」と云はるなり。

7-10. 雑林善地

- [41b⁵] 雑林遊苑の西方二十由旬に「雑」と云はるる善地あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬あり。応に前の善地に於るが如くに広説されるなり。

7-11. 歡喜林

- [41b⁶] 天城の北方二十由旬に「喜林」(Nandanavana)と云はるる遊苑あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて、金の牆壁を以て遍く遶らされ、牆壁の高さは一由旬あり。応に前に説けるが如くに広説されるなり。

- [41b⁸] 〔但し〕此の殊別あるなり。云何の故にか遊苑の名は「喜林」と云はるるや。曰はく、喜林遊苑中に喜と云はる蓮池と、樹と葉と花と果と衣と、莊嚴の喜なると、諸の喜天女あるを以ての故に。三十三の諸天は喜林遊苑中に戯れ、歎を尽すとき、また普く歡喜し、甚だ喜悅し、歡び、意樂して戯れ歎をつくし、己業の果を享受するを以ての故に遊苑の名は「喜林」と云はるなり。

7-12. 歎喜善地

[42a⁴] 喜林遊苑の北方二十由旬に「喜」と云はるる善地あり。長さ二百五十由旬、幅に於ても亦二百五十由旬、全周は一千由旬ありて形容は善く、樂見するところにして端巖なり。応に前の善地に於るが如くに広説されるなり。

7-13. 圓生樹

[42a⁶] 天城の東北の方向に三十三の諸天の「圓生」(Pārijāta)と名づけられる樹あり。圓生の根は五十由旬下方(地中)に入り、高さに於ては百由旬あり。樹枝は外に分岐して五十由旬あり。

[42a⁷] 圓生の樹枝は五あり。〔第〕一の樹枝は東方五十由旬にて垂下り、第二の樹枝は南方五十由旬にて垂下り、第三の樹枝は西方五十由旬にて垂下り、第四の樹枝は北方五十由旬にて垂下り、上方の樹枝は五十由旬上空に伸びる。

[42b¹] 圓生は縦百五十由旬あり、幅に於ても亦百五十由旬あり。全周も亦三百五十由旬あり。圓生の香は順風に於ては百由旬に芳香を薰じ、逆風には五十由旬に芳香を薰ずるなり。十八由旬に於ては光と色彩とを以て赫赫洋洋として耀かしむなり。

[42b³] 三十三の諸天の圓生樹の枝梢黄色になれる時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹の枝梢は黄色になりしを以て、今や程経ずして葉は繁くなるなり」とて遍く歎喜し甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機会あるなり。

[42b⁴] 三十三の諸天の圓生樹の葉、繁くなれる時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹葉は繁りたるを以て、程経ずして蕾を結ぶなり」とて甚だ歎喜し、甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機会あるなり。

[42b⁶] 三十三の諸天の圓生樹の蕾を結べるその時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹葉は蕾を結びたるを以て、程經ずして將に蕾を開かんとするなり」とて遍く歡喜し甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機會あるなり。

[42b⁸] 三十三の諸天の圓生樹の蕾を開かんとするその時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹葉は蕾を開かんとせるを以て、今や程經ずして半開になるなり」とて遍く歡喜し甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機會あるなり。

[43a²] 三十三の諸天の圓生樹の花、半開なるその時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹葉は花半開なるを以て、今や程經ずして花開くなり」とて遍く歡喜し甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機會あるなり。

[43a³] 三十三の諸天の圓生樹の花開けるその時は、三十三の諸天「嗚呼、此の圓生樹葉は開花なるを以て、今や程經ずして全く開花するなり」とて遍く歡喜し甚だ悦びて住するその時なりて、亦その機會あるなり。

[43a⁵] 三十三の諸天の圓生樹の全く開花せるに、全く開花せる〔その〕香は順風に於ては百由旬に芳香を薰じ、逆風には五十由旬に芳香を薰ずるなり。十八由旬に於ては光と色彩とを以て赫赫洋洋として耀かしむるなり。

7-14. 教証

(『中阿含經』2「昼度樹經」[T. 1, 422a] 『增壹阿含經』39.2「昼度」[T. 2, 729b] 『圓生樹經』[T. 1, 810c])

[43a⁷] 世尊も亦た此の如く〔説けり〕。

[43a⁷] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の根は五十由旬下方に入り、

高さに於ては百由旬あり。樹枝と樹梢と諸支とは五十由旬ひろがるなり」

[43a⁸] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の枝梢黄色になれる時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹の枝梢は黄色になりしを以て、今や程経ずして葉は繁くなるなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[43b²] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の葉、繁くなれる時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹葉は繁りたるを以て、程経ずして蕾を結ぶなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[43b⁴] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の蕾を結べるその時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹葉は蕾を結びたるを以て、程経ずして將に蕾を開かんとするなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[43b⁵] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の蕾を開かんとするその時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹葉は蕾を開かんとせるを以て、今や程経ずして半開になるなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[43b⁷] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の花、半開なるその時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹葉は花半開なるを以て、今や程経ずして花開くなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[44a¹] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の花開けるその時、三十三の諸天『嗚呼、此の圓生樹葉は開花なるを以て、今や程経ずして全く開花するなり』とて遍く歡喜し甚だ悦びて住する時又あるなり」

[44a³] 「比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の全く開花せるに、全く開花せる〔その〕香は順風に於ては百由旬に芳香を薰じ、逆風には五十由旬に芳香を薰ずるなり。十八由旬に於ては光と色彩とを以て赫赫

洋洋として耀かしむるなり」

[44a⁵] 「圓生樹の全満開せる後に、三十三の諸天は、夏四ヶ月、天の五欲樂 (pañcakāmaḡa) を具へ持し、戯れ、歎を尽して己業の果を享受するなり。比丘等よ、三十三の諸天の圓生樹の威力はこれ程なり」と説きたまへり。

[44a⁶] 中間の頰に於て「始に枝梢黄色になり、それより葉繁り、蕾を結び、將に蕾開かんとして、花半開し、花全開するなり」

7-15. 如氈布碧板

[44a⁷] 圓生樹の側に三十三の諸天の「青白の氈布の如き板石」(Pāṇḍu-kambalaśīlātala) あり。長さ五十由旬、幅に於ても亦五十由旬、全周二百由旬、高さ五由旬半と十八分の一あり。形容は善く、樂見するところにして端巖なり。画き、よく画き、柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅綿若しくは綿の花弁の如きなりて、足を置くときは凹み、足を上ぐる時はもとに復して、無量の曼陀羅花は膝を没する程に普く覆ふなり。

[44b³] その中間に天の主なる帝釈の善獅子坐 (sinhāsana) と三十三の餘の諸天の坐が設けられてあるなり。そこに於て三十三の諸天は夏四ヶ月天の五欲樂等を具へ持し、戯れ、歎を尽して己業の果を享受するなり。

[44b⁴] 「青白の氈布の如き板石」の如き板石の至る処に、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[44b⁶] 陸より生じたる鳥の群は、美妙音と意樂音と柔軟音と、隨欲轉の有色の妙音を発するなり。その近辺には青、黄、赤、白の四種の如

意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の楽器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[45a²] 甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高櫓と諸楼閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戲所と諸橋梁と、跳躑 (praskandana) 往往 (pracāraka) 高笑 (ghargharaka) と、婦人の集まりによりて美飾され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囃したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て三十三の諸天は眷属と共に戯れ歡を尽して自己の業の果を享受するなり。

7-16. 象王園行守地子

[45a⁶] 三十三の諸天の「守地子」(Airāvana) と名づけらる行園の象王(伊羅槃行園象王)あり、形容は善く樂見するところにして端嚴なり。拘物陀 (kumuda) 華の色の如く白色にして七支をよく持するなり。その頭の形容は善く樂見するところにして端嚴なり。緑にして有命潮生紅虫 (prāṇaka) の色の如く、中間は赤にして六牙あり。象王守地子の長さは二由旬半、幅一由旬、高さ一由旬半、全周七由旬あり。

[45b¹] 象王守地子の眷属、四象あり。それらの一切はまた形容は善く樂見するところにして端嚴なり。拘物陀華の色の如く白色にして七支を甚だよく持するなり。その頭の形容は善く樂見するところにして端嚴なり。緑にして有命潮生紅虫の色の如く、中間は赤にして六牙のみあり。

[45b³] 三十三の諸天、園地に詣らんと欲する時、象王守地子は三十二頭を幻化し、各々の頭に六個づつの牙、各々の牙に七個づつの蓮池、各々の池に七個づつの蓮華、各々の蓮華に七個づつの茎、各々の茎に七人づつの天の童女、各々の天の童女に七人づつの侍女、各々の侍女に七個づつの鑼 (tūrya) を幻化するなり。それら一切の頭部中、特に優れたものに諸天の主なる帝釈が乗り、それより他の諸象中、特に優れたものに近主なる諸三十三〔天〕が乗り、それより他の諸象には〔諸餘の〕三十三の諸天が乗るなり。その善く疾走せしこと譬へば破壊の風、もしくは碎破風の如し。その如くなれば、天もしくは天女に於ても「此は我が前方より来る意向なりや、もしくは後より来るなりや」と此く思惟することさへなし。

[45b⁷] その時、象王守地子をして三十三の諸天は別々に城門より発し、発して別々に園 (udyāna) に至らしむるなり。かく神変現行 (ṛddhiabhisamskāra) を与へて、即ち天もしくは天子の神変大にして大威力なる云何なるものにもふさはしく、且つ等しく自身を現化し、天の五欲樂 (pañcakāmaguṇa) 等を携へ持し、戯れて歎を尽くすなり。

7-17. 阿修羅の住居

[46a¹] 応に天の主なる帝釈にして三十三の諸天の王位と主の自在を行ふ (rājyaiśvaryādhipatyam kārayati) が如く、阿修羅の主なる毘摩質多 (Vemacitra) は、諸阿修羅の王位の自在と支配をなすなり。

[46a²] 応に三十三の諸天の王宮を圍繞せる城は「善見」(Sudarśana) と云はるるが如く、諸阿修羅の王宮を圍繞せる城も亦「持金」(Hemavata) と云はるなり。

[46a³] 応に天の主なる帝釈の宮殿 (prāsāda) は「最勝」(Vaijayanta)

と云はるるが如く、阿修羅の主なる毘摩質多の宮殿はまた「棄捨」(Nikṣepa) と云はるなり。

[46a⁴] 三十三の諸天の天の会堂 (devasabhā) は「善法」(Sudharma) と云はるるが如く、応に諸阿修羅の阿修羅の会堂は「善財」(Sudhanā) と云はるなり。

[46a⁵] 応に三十三の諸天に四歓喜園 (udyāna) 即ち「衆車」(Caitrarathavana) と「麁澀」(Pāruṣyavana) 「雜林」(Miśrakavanavana) 「喜林」(Nandanavanavana) とあるが如く、また諸阿修羅の四歓喜園、即ち「普喜」(Ānanda) と「最喜」(Pramudita) と「歡喜」(Nandana) と「歡喜園」(Nandanārāma) あるなり。

[46a⁶] 三十三の諸天に諸善地 (subhūmi) 即ち「衆」と「麁澀」と「雜」と「喜」とあるが如く、また諸阿修羅の四善地、即ち「普喜」と「最喜」と「歡喜」と「歡喜園」と〔ある〕なり。

[46a⁸] 三十三の諸天の圓生 (Pārijāta) 樹の如く、諸阿修羅の樹は亦「蘇質怛羅波咤羅」(Citrapātala) と云はるなり。

[46a⁸] 三十三の諸天の「青白の氈布の如き板石」(Pāṇḍukambalaśilātala) の如く、諸阿修羅の〔板石〕は亦「阿修羅の板石」(Asuraśilātala) と云はるなり。

[46b¹] 三十三の諸天の行園の象王「守地子」(Airāvana) の如く、諸阿修羅漢の行園の象王は亦「雪山峰」(Kailāsakūṭa) と云はるるなり。

[46b²] 三十三の諸天の行戦闘の象王「極堅固」(Supratīṣṭhita) の如く、諸阿修羅の行戦闘の象王は亦「難可」(Duḥsaha) と云はるなり。

二
一
[46b³] 三十三の諸天の馬王は「雲勢」(Balāhaka) と云はるるが如く、諸阿修羅の馬王は亦「髻頸」(Śailakṛkātaka) と云はるなり。

[46b⁴] 三十三の諸天の天城に眷属を持つが如く、諸阿修羅の〔阿修羅〕城にも亦、眷属を持するなり。

[46b⁵] 諸阿修羅の阿修羅の統治はまた三十三の諸天の如く広説せらるなり。

[46b⁵] 世間施設第七章なり。

第5巻 (305)

[46b⁶] 世間施設第五巻なり。

第8章

[46b⁶] 頌に於て「半と六と刹那と境界、短と寒冷と減少と東方想なり」

8-1. 太陽の運行と昼夜の長短

[46b⁷] 六ヶ月間、太陽は南方に往くなり。南方に往く時、五由旬半と十八分の一に於て瞻部州を過ぎ、大海の五由旬半と十八分の一由旬を侵徹するなり。

[46b⁸] 六ヶ月間、太陽は北方に往くなり。北方に往く時、五由旬半と十八分の一に於て大海を過ぎ、瞻部州の五由旬半と十八分の一由旬を侵徹するなり。

[47a¹] 六ヶ月間、太陽は南方に往き、南方に往く時、昼は刻々に減少し、夜は刻々に生ずるなり。

[47a²] 六ヶ月間、太陽は北方に往き、北方に往く時、夜は刻々に減少し、昼は刻々に生ずるなり。

[47a³] 六ヶ月間、太陽は南方に往き、南方に往く時、瞻部州の境界を速やかに過ぎるなり。

[47a³] 六ヶ月間、太陽は北方に往き、北方に往く時、瞻部州の中間を長らく浸透するなり。

[47a⁴] 云何の故にか冬夜は長く昼は短きや。曰はく、六ヶ月間、太陽は

南方に往き、南方に往く時、膽部州の境界を速やかに浸透するなり。
その故に冬夜は長くして昼は短きなり。

[47a⁵] 云何の故にか春と夏とは昼長く夜は短きや。曰はく、六ヶ月間、
太陽は北方に往き、北方に往く時、膽部州の中間を長らく浸透する
を以て、その故に春と夏とは昼長く夜は短きなり。

[47a⁶] 云何の故にか冬は寒冷なるや。曰はく、六ヶ月、太陽は南方に往
き、南方に往く時、四万由旬より太陽の諸発光は大海に下るを以て
諸州は寒冷なるなり。その故に冬は寒冷なり。

[47a⁷] 云何の故にか春と夏は暑くなるや。曰はく、六ヶ月、太陽は北方
に往き、北方に往く時、四万由旬より太陽の諸発光は諸州に下るを
以て諸州は暑くなるなり。その故に春と夏は暑くなるなり。

8-2. 月の満ち欠け

(cf. 『俱舍論』 卷十一 [T. 29, 59b] Kārikā, III-62cd [Pradhan. 1st ed. p. 166] [山口・舟橋訳 p.395])

[47a⁸] 云何の故にか月輪 (candramaṇḍala) は月の後半月 (白分) 十六
日を過ぎてより光 (prabhā) を減じ、色 (varṇa) と輪 (maṇḍala)
と円 (parimaṇḍala) とを減ずるや。曰はく、太陽と月とは運行し
て会合せんとす。その運行せる己の輪によりてはその影を成さず、
太陽は月輪を覆ひてその輪を隠し、現ぜざるを以て、その故に月輪
は月の後半月の十六日より過ぎて光を減じ、色と輪と円とを減ずる
なり。

[47b²] 云何の故にか月輪は月の後半の新月に一切の部分を現ぜざるや。
曰はく、太陽と一切の部分に於て会合し統合し、その己の輪により
ては影を成さずしてその輪を覆ひ、太陽は月輪を隠して現ぜざるを
以て、その故に月輪は月の後半の新月に一切の部分を現ぜざるなり。

[47b⁴] 云何の故にか月輪は月の前半月の一日を過ぎてより光を生じ、色と輪と円とを生ずるや。曰はく、太陽と離れて行き、太陽と離れて往きて、月は己の輪によりて影を水煙と為すなり。影、水煙と為りてその輪の辺は輝くなり。その故に月輪は月の前半月の一日を過ぎてより光を生じ、色と輪と円とを生ずるなり。

[47b⁶] 云何の故にか月輪は前半月の十五日に一切の部分円満になるや。曰はく、太陽と一切の部分に於て別れ行き離れ、その輪によりて太陽の光線より成る影を満たし、その輪に於てその遮障なく、月はその輪を輝かすを以て、その故に月輪は前半月の十五日に一切の部分円満になるなり。

[47b⁸] 云何の故にか月輪の中間は翳り端は光浄にして翳りなきなるや。曰はく、州に近づくによりてその中間は翳り、且つ水に近づくによりてその端は光浄にして翳りなし。諸州の影像 (pratibimba) によりて中間は翳り、且つ水の影像によりて端は光浄にして翳りなきなり。或は月輪の上部に歡喜園と苑林と諸家と諸樓閣あるを以ての故に月輪の中間は翳り、端は光浄にして翳りなきなりとも。

8-3. 四州の方位の相対的關係

[48a³] 瞻部州に太陽が昇りし時、東勝身〔州〕に於ては太陽は〔天〕中なり、北俱盧〔州〕に於ては太陽は西にあり、西牛貨〔州〕に於ては深夜なり。

[48a⁴] 瞻部州に於て太陽〔天〕中にある時、東勝身〔州〕に於ては太陽は西にあり、北俱盧〔州〕に於ては深夜なり、西牛貨州に於ては太陽は昇るなり。

[48a⁵] 瞻部州に於て太陽は西にある時、東勝身〔州〕に於ては深夜なり、北俱盧州に於ては太陽は昇り、西牛貨〔州〕に於ては太陽は〔天〕

中にあり。

- [48a⁶] 瞻部州に於て深夜なりし時、東勝身州に於ては太陽は登り、北俱盧〔州〕に於ては太陽は〔天〕中にあり、西牛貨州に於ては太陽は西にあるなり。
- [48a⁷] 応に瞻部州を首となして述べたるが如く、東勝身〔州〕と北俱盧〔州〕と西牛貨〔州〕に首となすも同様に広説せらるるなり。
- [48a⁸] 瞻部州の東方は東勝身〔州〕にては南方なり。北俱盧〔州〕にては西方なり。西牛貨〔州〕にては北方なり。
- [48a⁹] 瞻部州の南方は東勝身〔州〕にては西方なり。北俱盧〔州〕にては北方なり。西牛貨〔州〕にては東方なり。
- [48b¹] 瞻部州の西方は東勝身〔州〕にては北方なり。北俱盧〔州〕にては東方なり。西牛貨〔州〕にては南方なり。
- [48b²] 瞻部州の北方は東勝身〔州〕にては東方なり。北俱盧〔州〕にては南方なり。西牛貨〔州〕にては西方なり。
- [48b³] 応に瞻部州を首となして述べたるが如く、北俱盧〔州〕と西牛貨〔州〕と東勝身〔州〕を首となすも同様に広説せらるるなり。
- [48b⁴] 方角に四種あり。東方と南方と西方と北方となり。
- [48b⁴] 東方に於る有情には東方に於る想等あり。〔かの〕有情にはまた南方に於る想等あり。有情にはまた西方に於る想等あり。有情にはまた北方に於る想等あり。
- [48b⁵] 南方に於る有情には南方に於る想等あり。〔かの〕有情にはまた東方に於る想等あり。有情にはまた西方に於る想等あり。有情にはまた北方に於る想等あり。
- [48b⁷] 西方に於る有情には東方に於る想等あり。〔かの〕有情にはまた南方に於る想等あり。有情にはまた西方に於る想等あり。有情にはまた北方に於る想等あり。

[48b⁸] 北方に於る有情には東方に於る想等あり。〔かの〕有情にはまた南方に於る想等あり。有情にはまた西方に於る想等あり。有情にはまた北方に於る想等あり。

[49a¹] それぞれの方角に於て此の如く仮託するなり。

[49a¹] 世間施設第八章なり。

第9章

[49a²] 頌に於て「月と太陽との二つの量〔及び〕諸星は此の如し、六ヶ月間太陽は往き、損なはしむるは最後にあり」

9-1. 月の量

[49a²] 月輪の量は幾ばくなるや。日はく、月輪は縦五十由旬、横もまた五十由旬、全周百五十由旬、厚みは五由旬半と十八分の一由旬あり。〔月の天宮は〕形容は善く樂見するところにして端嚴なり。水晶によりて成ぜられ、金の墻壁を以て遍く遶らされ、その墻壁の高さは半由旬あり。その墻壁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の墻衛護ありて、上方に聳ゆる箭窓と及び下方に垂下りたる箭窓と、連続せる橋梁とは四種あり、金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。その中の敷地は形容善く樂見するところにして端嚴なり。画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること恰も兜羅綿 (tūa) 若しくは綿の花弁の如きなりて、足を置くときは凹み、足を揚げる時はもとに復し、曼陀羅花等は膝を没する程に覆ひ、そこに於て諸非人は風の威力を以て枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなり。此の如く、月の福德の威力によりて月城等に大風を起して枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

[49b¹] 月輪の中に狭道あり。長さ五十由旬、幅一由旬半あり。形容は善く楽見するところにして端嚴なり。金砂を散布し、梅檀の水を撒布し、その左右両側に作られたる蓮池等あり。それ等の蓮池にはまた所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られ、その池の四方には階〔道〕等あり。それ等の階〔道〕にはまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られてあるなり。それ等の蓮池はまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の欄干によりて遍く遶らされ、金の欄干の台座と台階子と釘子とは銀を以て造られ、銀のは金を以て造られ、瑠璃のは水晶を以て造られ、水晶〔の欄干〕の台座と台階子と釘子とは瑠璃を以て造られてあり、形容は善く楽見するところにして端嚴なり。

[49b⁷] 水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黃蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる種々の鳥が、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。それ等の近辺には、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[50a²] 草原より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の楽器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。諸天と天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[50a⁶] 甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高橋と諸楼閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戲所と諸橋梁とは婦人の集まりによりて美飾され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囃したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て月天子は眷属と共に戯れ飲を尽して自己の業の果を享受するなり。

9-2. 日(太陽)の量

[50b¹] 日輪の量は幾ばくなるや。日はく、日輪は縦五十一由旬、横もまた五十一由旬、全周百五十三由旬、厚みは五由旬半と十八分の一由旬あり。〔日の天宮は〕形容は善く樂見するところにして端嚴なり。水晶によりて成ぜられ、金の墻壁を以て遍く遶らされ、その墻壁の高さは半由旬あり。その墻壁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の墻衛護ありて、上方に聳ゆる箭窓と及び下方に垂りたる箭窓と、連続せる橋梁とは四種あり、金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造となり。その中の敷地は形容善く樂見するところにして端嚴なり。画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること恰も兜羅綿、若しくは綿の花弁の如きなりて、足を置くときは凹み、足を揚げる時はもとに復し、曼陀羅花等は膝を没する程に覆ひ、そこに於て諸非人は風の威力を以て枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなり。此の如く、太陽の福德の威力によりて太陽城等に大風を起して枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

[50b⁸] 日輪の中に狭道あり。長さ五十一由旬、幅一由旬半あり。形容は善く樂見するところにして端嚴なり。金砂を散布し、栴檀の水を撒布し、その左右両側に作られたる蓮池等あり。それ等の蓮池にはまた所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られ、そ

の池の四方には階〔道〕等あり。それ等の階〔道〕にはまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られてあるなり。それ等の蓮池はまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の欄干によりて遍く遶らされ、金の欄干の台座と台階子と釘子とは銀を以て造られ、銀のは金を以て造られ、瑠璃のは水晶を以て造られ、水晶〔の欄干〕の台座と台階子と釘子とは瑠璃を以て造られてあり、形容は善く楽見するところにして端嚴なり。

[51a⁹] 水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黃蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる種々の鳥が、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。それ等の近辺には、花樹と果樹の様々なるもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[51b¹] 草原より生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。種々の楽器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鑼と、勢力ある手太鼓とを生ずる樹あり。種々の莊嚴、即ち諸々の手嚴具と足嚴具と輝嚴具と不輝嚴具とを生ずる樹等あり。諸天、或は天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

[51b⁵] 甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高櫓と諸樓閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戲所と諸橋梁とは婦人の集まりによりて美飾され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囃したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て日天子

は眷属と共に戯れ歎を尽して自己の業の果を享受するなり。

9-3. 諸星の量

[51b⁸] 星の諸形の量は幾ばくなるや。曰はく、星の形は様々なるも、一切の中にて最大なるものは、十八俱盧舍 (krośa) なり。一切の中、最小なるものは三俱盧舍なり。過半数は十俱盧舍と十二俱盧舍となり。〔諸星の天宮は〕形容は善く楽見するところにして端嚴なり。水晶によりて成ぜられ、金の墻壁を以て遍く遶らされ、その墻壁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の墻衛護と、四種の箭窓と四観戲所あり。その中の敷地は形容善く楽見するところにして端嚴なり。画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること恰も兜羅綿、若しくは綿の花弁の如きなりて、足を置くときは凹み、足を揚げる時はもとに復し、曼陀羅花等は膝を没する程に覆ひ、そこに於て諸非人は風の威力を以て枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなり。此の如く、諸天の福德の威力によりて、無量の最勝〔房〕住所等に大風を起して枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

[52a⁶] それ等の中には作られたる蓮池あり。それ等の蓮池はまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られ、それらの蓮池の四方には階〔道〕等が造られてあり。それ等の階〔道〕にはまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四辺によりて造られてあるなり。それ等の蓮池はまた金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の欄干によりて遍く遶らされ、金の欄干の台座と台階子と釘子とは銀を以て造られ、銀のは金を以て造られ、瑠璃のは水晶を以て造られ、水晶〔の欄干〕の台座と台階子と釘子とは瑠璃を

以て造られてあり、形容は善く樂見するところにして端嚴なり。

[52b²] 水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黃蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる種々の鳥が、美妙音と意樂音と柔軟音と、隨欲轉の有色の妙音を發するなり。それ等の近辺には、花樹と果樹の様々なもの善く成長し、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[52b⁵] 草原より生じたる鳥の群は、美妙音と意樂音と柔軟音と、隨欲轉の有色の妙音を發するなり。青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、乃至、広説されたる如くなり。

[52b⁷] それ等に於る無量の房に住する諸天子は、戯れ、歡を尽して自己の業の果を享受するなり。

9-4. 日と月（諸餘の問題）

[52b⁷] 太陽にして六ヶ月にて往行するを、月は一ヶ月間にして往来するなり。

[52b⁷] 云何の故にか日輪を見れば眼を圧し、月輪を見んに眼を害せざらんや。日はく、月輪には水晶 (candrakānta) にして清淨玉 (sphatīka) なるものあり、然るに日輪には火晶 (sūryakānta) あるをもって、その故に日輪を見れば眼を圧し、月輪を見んに眼を害せざるなり。

一
○ [53a²] 世間施設第九章なり
二

第10章

[53a²] 頌に於て「〔四〕大に於る想と、我に於る想と、虚空に於て地想

と一時と二〔時〕をなすこと、刹那は最後なり」

10-1. 四大と諸想

- [53a³] 四大 (catvāri mahābhūtāni) とは地界 (pṛthvīdhātu) と水界 (abdhātu) と火界 (tejasdhātu) と風界 (vāyudhātu) となり。
- [53a³] 有情には地に於る諸の地の想 (saṃjñā) も亦あり、諸の水の想も亦あり、諸の火の想も亦あり、諸の風の想も亦あり。
- [53a⁴] 有情には水に於る諸の地の想も亦あり、諸の水の想も亦あり、諸の火の想も亦あり、諸の風の想も亦あり。
- [53a⁵] 有情には火に於る諸の地の想も亦あり、諸の水の想も亦あり、諸の火の想も亦あり、諸の風の想も亦あり。
- [53a⁶] 有情には風に於る諸の地の想も亦あり、諸の水の想も亦あり、諸の火の想も亦あり、諸の風の想も亦あり。
- [53a⁶] 有情には地に於る諸の我の想も亦あり。「地界なるものは我なり、我なるものは地なり、かくの如く地と我とは不二分離せずして区別せられざるなり、我所と我は円満であるなり」とて彼等は地を恭敬し、師事し、承侍し、敬を致すなり。彼等は恭敬がなされ、師事がなされ、承侍がなされ、敬が致されるによりて喜び、喜び、我を忘れて恭敬し、近倚して住するを心に記別するなり。
- [53b¹] 有情には水と火と風とに於る諸の我の想も亦あり。「風なるものは我なり、我なるものは風なり。かくの如く風と我とは不二分離せずして区別せられざるなり。我所と我は円満であるなり」とて彼等は風を恭敬し、師事し、承侍し、敬を致すなり。彼等は恭敬がなされ、師事がなされ、承侍がなされ、敬が致されるによりて喜び、喜び、我を忘れて恭敬し、近倚して住するを心に記別するなり。
- [53b³] 有情には地に於る諸の虚空の想も亦あり。虚空に於る諸々の地の

想も亦あり。

[53b³] 云何にして地に於る虚空の想と云へるや。胡麻 (tila) なき或者が、井戸を掘る或者に此く云ひて曰はく「嗚呼、幹に火をつけるが如き人、牡牛を見たりや」彼は曰はく「見ざるなり」「胡麻を食ひ、或は食はざるや」「食はざるなり」と。此の如くが地に於る虚空の想なり。

[53b⁵] 云何にして虚空に於る地の想と云へるや。曰はく、或る婆羅門ありて驢車 (aśvatari, gardebha) にて往き、驢車より降り、驢車の留め金をつけて後、留め金を虚空に投げ上げて頭をめぐらし、地に仰向に臥するが如きが虚空に於る地の想なり。

10-2. 時節に於る昼夜の長短 (cf. 『大毘婆沙論』 卷百三十六 [T. 27, 701c])

[53b⁷] 一年中の一時に於て、夜は十八須臾 (mūrtha)、昼は十二須臾なり。

[53b⁷] 一年中の一時に於て、夜は十八須臾、昼は十二須臾なるとは云何。魔伽 (māgha) 月の前半月八日に於て夜は十八須臾、昼は十二須臾あり、九日を越えて夜は減じ、昼は増長し、夜は各臘縛 (lava) に於て減じ、昼は各臘縛に於て増長するなり。

[54a¹] 一年中の一時に於て、昼は十八須臾、夜は十二須臾なり。

[54a¹] 一年中の一時に於て、昼は十八須臾、夜は十二須臾なるとは云何。曰はく、末伽始羅 (mṛgaśirṣa) 月の前半月八日に於て昼は十八須臾、夜は十二須臾あり。九日を越えて昼は減じ、夜は増長し、昼は各臘縛に於て減じ、夜は各臘縛に於て増長するなり。

[54a⁴] 一年の中の二時に於て、夜はまた十二須臾、昼に於てはまた十五須臾なり。

[54a⁴] 一年の中の二時に於て、夜はまた十二須臾、昼はまた十五須臾な

るとは云何。曰く、吠舎佉 (vaiśākhā) 月の前半月八日と羯栗底伽 (kārttika) 月の前半月八日に於て夜はまた十五須臾、昼もまた十五須臾なり。

10-3. 時間単位

[54a⁵] 四法あり。四方とは云何なるや。一刹那 (kṣaṇa) と一怛刹那 (tatksaṇa) と一臘縛 (lava) と須臾 (mūrtha) となり。

[54a⁵] 百二十刹那は一怛刹那なり、六十怛刹那は一臘縛なり、三十臘縛は一須臾なり、三十須臾は一日 (ahorātra) なり。一日の三十分の一は一須臾なり、一須臾の三十分の一は一臘縛なり、臘縛の六十分の一は一怛刹那なり、一怛刹那の百二十分の一は一刹那なり。

[54a⁷] 一刹那の量は云何なるや。即ち、婦人にして毛糸を紡ぐに、余りに長からず、余りに短からずして、羊毛のその摩羅羅 (malara) 程の長さが一刹那の量なり。

*編者補注：『大毘婆沙論』卷百三十六における『施設論』の引用文では、この箇所が「刹那」ではなく「怛刹那」の解説になっている（施設論説「如中年女、緝績蠶時、抖擻細毛、不長不短、齊此説爲“怛刹那”量」）[T. 27, 701b²⁻⁴]。なお「摩羅羅」(malara, bsnyad pa) の語は数量単位を示すと思われる。

[54a⁸] 此の如き刹那の百二十が一怛刹那なり、此の如き怛刹那の六十が一臘縛なり、此の如き臘縛の三十が一須臾なり、此の如き須臾の三十が一日なり、その一日の三十が一ヶ月なり、十二ヶ月が一年なり。

[54b¹] 世間施設第十章なり。

第11章

11-1. 大劫（教証）

[54b¹] 舍衛城に因縁あり。

[54b²] 世尊は此の如く説きたまへり「劫 (kalpa) に四阿僧祇あり。即ち阿僧祇を以て壊滅せる劫（壊劫）と、阿僧祇を以て壊滅の後〔住する〕劫（空劫）と、阿僧祇を以て起成せる劫（成劫）と、阿僧祇を以て起成の後〔住する〕劫（住劫）となり」

[54b³] 八十中劫が一大劫なり。二十中劫に於て世間は壊滅し、二十中劫に於て世間は壊滅し已りて住し、二十中劫に於て世間は起成し、二十中劫に於て世間は起成し已りて住するなり。

11-2. 三災

[54b⁴] 壊 (saṃvartanī) は三種なり、火災 (tejaḥsaṃvartanī) と水災 (apsaṃvartanī) と、風災 (vāyusaṃvartanī) となり。

[54b⁵] 三災の頂 (sīrṣa) は〔各々〕光音〔天〕と遍淨〔天〕と広果〔天〕となり。〔即ち〕火災の起こりし時は光音の諸天の破壊を頂となし、水災の起こりし時は遍淨の諸天の破壊を頂となし、風災の起こりし時は広果の諸天の破壊を頂となすなり。

[54b⁷] 七度の火災の後に一度の水災あり、七度の水災の後に一度の風災あり。

九七 11-3. 三中劫

[54b⁷] 中劫 (antarakalpa) は三〔種〕なり、刀兵 (śastra) 中劫と疾疫 (roga) 中劫と飢饉 (durbhikṣa) 中劫となり。〔中〕劫は兵刃と疾病と飢餓との三を以て畢竟するなり。

11-4. 刀兵劫

- [54b⁸] 刀兵中劫の来たりて起こりし時、諸人の寿命は十歳に達するなり。
- [55a¹] 寿命十歳の諸人に於ては、長生の者は十歳を獲るなり。譬へば現在の諸人に於ては、長生し妙にして安穩に供養する者は百歳もしくは少しく出づるを獲る。その如く、寿命十歳の諸人のうち長生の者は十歳を獲るなり。
- [55a²] 寿命十歳の諸人の一兒、愛らしく意に叶へば、母は善く祈願して「我が兒にして十歳に至るまで長生すべし」と善く祈願するなり。譬へば現在の諸人の一兒、愛らしく意に叶へば、母は善く祈願して、斯く「我が兒にして百歳に至るまで長生すべし」と善く祈願する。その如く、寿命十歳の諸人の兒、愛らしく意に叶へば、母は善く祈願して「我が兒にして十歳に至るまで長生すべし」と善く祈願するなり。
- [55a⁵] 寿命十歳の諸人の兒女、生まれて五ヶ月に至れば妻として与へるなり。譬へば現在の諸人の兒女は、十五歳もしくは十六歳に至れば妻として与へる如く、寿命十歳の諸人の兒女は生まれて五ヶ月に至れば妻として与へるなり。
- [55a⁶] 寿命十歳の諸人の衣のうちでは髮毛布 (keśakambala) が最勝なり。譬へば現在の諸人に於ては細軟 (sūkṣma) なる迦尸布 (kāśika)、若しくは細軟なる亜麻布 (kṣaumaka)、若しくは細軟なる頭求羅布 (daukūlaka)、若しくは細軟なる高詰薄迦布 (koṭambaka) が最勝なるが如く、寿命十歳の諸人の衣のうちでは髮毛布が最勝なり。
- [55a⁸] 寿命十歳の諸人の段食 (kavaḍikārāhāra) のうちでは稗子 (kodrava) が最勝なり。譬へば現在の諸人に於ては黒粳の米粥 (śālyanna) の淨食と菜 (śāka) と汁 (rasa) と種々の禽類 (vihaga) が

最勝なるが如く、寿命十歳の諸人のうちでは稗子が最勝なり。

[55b¹] 寿命十歳の諸人の五種の味 (rasa) は消失するなり。五とは云何。乳 (ksīra) あり、また酪 (dadhi) ありと雖も酥油 (ghṛta) は生ぜず、胡麻 (tila) あり、また胡麻の粉末ありと雖も胡麻油 (taila) は生ぜず、蜜蜂 (bhramara) あり、また蜜蜂の汚汁ありと雖も蜂蜜 (bhrāmara, madhu) は生ぜず、甘蔗 (ikṣu) あり、また汁ありと雖も黒糖 (guda) は生ぜず、鹽 (lavana) は腐るなり。

[55b³] 寿命十歳の諸人は武器を嚴飾し武器を纏うなり。譬へば現在の諸人が首飾り、或は腕飾り、或は耳環り、或は肩飾り、或は掌飾り、或は足飾り、或は諸々の指輪、或は金銀の花環を持するが如く、寿命十歳の諸人は武器を嚴飾し武器を纏うなり。

[55b⁵] 寿命十歳の諸人に於ては、母を尊敬せず、父を尊敬せず、婆羅門を尊敬せざる者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるなり。譬へば現在の諸人に於ては、母を尊敬し、父を尊敬し、婆羅門を尊敬する者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるが如く、寿命十歳の諸人に於ては、母を尊敬せず、父を尊敬せず、婆羅門を尊敬せざる者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるなり。

[55b⁸] 寿命十歳の諸人に於ては、有情は相互を見て瞋恚心と殺害心とに近待するなり。譬へば現在の諸人に於ては、鹿獐者が閑静処の鹿を見て甚だしく瞋恚心と殺害心とに近似するが如く、有情は相互を見て甚だしく瞋恚心と殺害心とに近待するなり。

[55b³] 寿命十歳の諸人は武器を嚴飾し武器を纏うなり。譬へば現在の諸人が首飾り、或は腕飾り、或は耳環り、或は肩飾り、或は掌飾り、或は足飾り、或は諸々の指輪、或は金銀の花環を持するが如く、寿命十歳の諸人は武器を嚴飾し武器を纏うなり。

[55b⁵] 寿命十歳の諸人に於ては、母を尊敬せず、父を尊敬せず、婆羅門

を尊敬せざる者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるなり。
譬へば現在の諸人に於ては、母を尊敬し、父を尊敬し、婆羅門を尊敬する者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるが如く、寿命十歳の諸人に於ては、母を尊敬せず、父を尊敬せず、婆羅門を尊敬せざる者が尊重され、恭敬せられ、甚だ賞賛せられるなり。

[55b⁸] 寿命十歳の諸人に於ては、有情は相互を見て瞋恚心と殺害心とに近待するなり。譬へば現在の諸人に於ては、鹿獐者が閑静処の鹿を見て甚だしく瞋恚心と殺害心とに近似するが如く、有情は相互を見て甚だしく瞋恚心と殺害心とに近待するなり。

[56a³] 寿命十歳の諸人に於て、諸住処に七日の間、刀兵〔劫〕生起す。彼等は樹木、若しくは砂、若しくは、若しくは瓦をもまた刀剣となす。享受する一切のものは刀剣の如く鋭利になりて音を立て、甚だ鋭利になりて音を立てて、彼等は相互に剣を取り合ふなり。親族は尽き、受用 (ābhoga) は尽き、財宝は尽きるなり。

[56a⁵] その刀兵の中間劫は七日のみにして尽くなり。七日を過ぎて終に達すると云はるるなり。その時、何処に〔生ずるが〕適切なりや。死後、彼等一切は肉体を離れて諸地獄中に生ずるなり。

[56a⁶] 時に、刀兵中間劫に於て結束して殺し合ひ、譏り、普く非難せる者達の或る者は、水難処、山難処、稠密なる山麓、密林等に入る。そこにて七日間、戯れ、水によりて生き、止住して後に、村、町、国土、王宮の周囲に還来す。彼等有情は互ひを相ひ見て、甚だしき慈愍と愛敬と謙遜と愛憐の心を以て近住し「嗚呼、生存せる有情を見るなり。嗚呼、生存せる有情を見るなり」と斯く云ふなり。譬へば現在の諸人の母に、愛らしく意に叶ふ一兒ありて、八ヶ月若しくは九ヶ月に至りて謁え、甚だしき慈と愛敬と謙遜と愛憐の心を以て近住し「嗚呼、生存せる兒を見るなり。嗚呼、生存せる兒を見るな

り」と斯く云ふが如く、彼等有情は互ひを相ひ見て、甚だしき慈愍と愛敬と謙遜と愛憐の心を以て近住し「嗚呼、生存せる有情を見るなり。嗚呼、生存せる有情を見るなり」と斯く叫ぶなり。

[56b⁴] 中間の頌に於て「長生と兒女と衣と食と消失と、諸瓔珞と誹謗と瞋恚と、七日住して刀兵生起するとなり」

11-5. 十善業と寿命の延長

[56b⁵] 彼等有情は「我等は刀劍によりて殺生し、此を以て互いに破壊せしめ、親族を尽し、受用を尽し、財宝を尽して、我等は苦法を如実に執りて住するなり。されば我等は善法を如実に執受して住すべきなり」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に殺生あり、以て我等は刀劍による殺生を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は刀劍による殺生を断ずるなり。寿命十歳の諸人、刀劍による殺戮を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命二十歳を獲るなり。

[56b⁶] 寿命二十歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色 (varṇa) と力 (bala) と安樂 (sukha) と受用 (bhoga) 等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし。然らば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に不与取あり、以て我等は不与取を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は不与取を断ずるなり。寿命二十歳の諸人、不与取を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命四十歳を獲るなり。その中の或者は寿命五十歳を獲るなり。

[57a³] 寿命五十歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然らば我等は何等

の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に欲邪行あり、以て我等は欲邪行を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は欲邪行を断ずるなり。寿命五十歳の諸人、欲邪行を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命百歳を獲るなり。

[57a⁷] 寿命百歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に妄語あり、以て我等は妄語を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は妄語を断ずるなり。寿命百歳の〔諸〕人、妄語を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命二百歳を獲るなり。その中の或者は寿命二百五十歳を獲るなり。

[57b⁸] 寿命二百五十歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に離間語（兩舌）あり、以て我等は離間語を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は離間語を断ずるなり。寿命二百五十歳の〔諸〕人、離間語を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命五百歳を獲るなり。

[57b⁹] 寿命五百歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に麁語あり、以て我等は麁語を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は麁語を断ずるなり。寿命二五百歳の〔諸〕人、麁語を断ずれば、

彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命一千歳を獲るなり。

[57b⁸] 寿命一千歳を獲たる諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に綺語あり、以て我等は綺語を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は綺語を断ずるなり。寿命一千歳の〔諸〕人、綺語を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命二千歳を獲るなり。その中の或者は寿命二千五百歳を獲るなり。

[58a⁴] 寿命二千五百歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に貪心あり、以て我等は貪心を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は貪心を断ずるなり。寿命二千五百歳の〔諸〕人、貪心を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命五千歳を獲るなり。

[58a⁷] 寿命五千歳の諸人は「嗚呼、諸善法を如実に執受せしために寿命は延長し、色と力と安樂と受用等もまた増大せり、されば我等はまた更に何等か善法を如実に執受して住すべし、然からば我等は何等の善法を執受して住せんや」と斯く思惟するなり。彼等は「嗚呼、我等に瞋恚心あり、以て我等は瞋恚心を断ずべし」と斯く思惟して、彼等は瞋恚心を断ずるなり。寿命二千五百歳の〔諸〕人、瞋恚心を断ずれば、彼等の産みたる諸兒と諸兒女は寿命一万歳を獲るなり。